

柴垣和夫著

三井・三菱の百年

日本資本主義と財閥



中公新書

172



中公新書 172

柴垣和夫著

三井・三菱の百年

日本資本主義と財閥

中央公論社刊

柴垣和夫 (しばがき・かずお)

1934(昭和9)年、東京に生まる。1956年、
東京大学経済学部卒業。1961年、東京大学
大学院社会科学研究科応用経済学博士課程
修了。現在、東京大学社会科学研究所教授。
経済学博士。専攻、日本経済論。

著書『現代日本産業発達史Ⅻ繊維上』(楳西光速編、
共著)(交詢社出版局)

『日本金融資本分析』(東大出版会)

『財政投融资』(遠藤湘吉編、共著)(岩波新書)

『日本資本主義の論理』(東大出版会)

『日本経済研究入門』(共編著、東大出版会)

『日本資本主義』(「講座 帝国主義の研究」6、
共著、青木書店)

『現代の国家と経済』(共編著、有斐閣)

三井・三菱の百年

中公新書 172

© 1968年

検印廃止

昭和43年10月25日初版

昭和54年 5月30日12版

著 者 柴垣和夫

発行者 高梨 茂

本文印刷 三晃印刷

表紙印刷 トープロ

製 本 小泉製本

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋 2-8-7
振替東京 2-34 電話(561)5921代

目次

はじめに

「明治百年」と日本資本主義 日本資本主義と財閥

2

I 政商としての三井・三菱

政商としての出発 維新政府と政商 政商三井の登場 三井銀行・三井物産の設立 三菱海運業の勃興 三井・三菱の抗争と日本郵船の設立 帰結―官業払下げ

9

II 政商から総合事業体へ

産業革命と日本資本主義の確立 政商からの脱皮 三井「中上川の改革」 三井家同族会と家憲 三菱合資会社の展開 三井物産と日本郵船 鉱山経営と囚人労働

31

III 財閥の成立

帝国主義段階への移行 独占への二つのコース 生産部門内部で

53

の多角化 流通部門からの多角化 銀行の役割 資本の集合体からひとつの資本による多角経営へ 財閥形態の成立 資本の封鎖性と自己金融 政治的進出

IV 財閥支配の確立

慢性不況下の支配集中 三井財閥の展開 三菱財閥の展開 財閥資本の事業基盤 コンツェルンとカルテル 金融市場と財閥 財閥商社の性格 日本金融資本の特質

V 戦争経済と三井・三菱

軍需インフレ下の好況と重化学工業化 ファシズムと財閥の「転向」 重化学工業への進出 日華事変と「軍財抱合」 三菱合資・三井合名の改組 太平洋戦争と経済統制 財閥企業の拡大と自己金融の崩壊 敗戦時の三井・三菱

VI 財閥の解体から復活へ

財閥解体の意図と結果 三井・三菱の解体過程 占領政策の転換と経済復興 財閥復活の胎動 独禁法第二次改正と資本グループの形成 この時期の財閥「復活」の限界

VII 高度成長下の「結集」と「反撥」

成長経済の展開と新しい重化学工業化 資本グループの「結集」

と石油化学コンビナート ワンセット主義 ワンセット主義と金融系列 グループ化への「反撥」の側面 独占体制の未完成な面

むすび——開放体制下の再編成

開放体制下の日本資本主義 資本グループの再編成 持株会社はできるか

あとがき

三井・三菱の百年

はじめに

「明治百年」と 数年前、「明治百年」がジャーナリズムを賑わしはじめたころ、「明治百年を肯定するか否定するか」という議論があった。「自分は明治百年を否定し、戦後

二〇年を肯定する」とかいった哲学者（？）がいた記憶があるが、歴史というものは、自分の好みで肯定したり否定したりできるものではない。右のような発言をした人の気持もわからないではないが、歴史は科学的に認識するものであって、価値観によって左右できるものではないのである。価値観あるいは世界観によって眺めた歴史は、結局、その価値観あるいは世界観を基準とした「善玉・悪玉」の物語にしかないであろう。価値観、世界観は、歴史の科学的認識を基礎に置いて、未来にむかって主張されてこそ意味があるのである。本書は、三井と三菱に素材をとりつつ、財閥百年の歴史を解明するのであるが、右にのべた趣旨からして、類書に多い「善玉、悪玉」式の叙述はしないつもりである。逆に、財閥百年の歩みが、なぜそのようなものであったのか、といういわば歴史過程の根拠をさぐってゆくことにしたいと思う。

ところで、「明治百年」というのは、いいかえれば「日本資本主義の百年」ということである。一八六八年に明治維新の幕がきっておとされる以前の日本は、約二五〇年にわたって徳川幕府の

支配する封建制度のもとにあった。一八五四年、黒船の来航によって鎖国をやめ、開国後の社会不安と動乱が維新に結実することによって、日本の資本主義化の起点があたえられたのである。だが、この日本の資本主義化への出発は、世界史の流れからみるときわめて遅い出発であった。イギリスの名誉革命におくれること一八〇年、アメリカの独立宣言やフランス大革命からも八〇年ないし九〇年のおくれをとっている。経済的側面からみると、一九世紀初頭の産業革命の達成によって確立したイギリス中心の自由競争的資本主義が、いまやドイツ、アメリカの擡頭によって、帝国主義時代への転化の門口にさしかかっていた時代なのである。

かように日本資本主義の出発は世界史的に遅かったのであるが、そればかりではない。逆に、日本の国内の条件からみるならば、その出発はむしろ早すぎたともいえるのである。徳川封建制は、封建社会としてみればかなり崩れた社会であったが、それでも二〇〇余年の鎖国は資本主義の土壌をなす商品経済の発展を押しとどめ、資本主義の自生的発展など期待しうべくもない状況のもとに維新をむかえたのであった。幕末の列強によるいわゆる植民地化の危機は、客観的条件として存在していたといっている。

こうした状況のもとで出発した明治維新政府は、周知のように「富国強兵」「殖産興業」のスローガンのもとに国力の増強をはかった。そしてそれは、政府の担当者の主観的意図はともあれ、日本の資本主義化の道にほかならなかった。しかもそれはたんなる資本主義化ではなかった。し

だいにあらわになってくる帝国主義的國際環境のもとで、国家的獨立を維持しつつ先進諸國に短時間のうちに追いつくためには、右のスローガンが端的にしめすように、軍事力の強化と、政府による上からの強力な指導性を伴った資本主義化が要請されたのである。

實際、日本の資本主義はきわめて急速に發展し、約半世紀のちには五大國の仲間入りをするくらいであつたが、それだけに發展の過程はゆがんでいた。一九世紀ヴィクトリア朝時代のイギリスにみられたような自由主義の開花もなく、日清戦争・日露戦争・第一次世界大戦とほぼ一〇年ごとに戦争をくりかえし、經濟構造の面では、繁榮する巨大資本の裏面に厖大な中小零細企業、貧困な農村が停滯していた。その帰結が太平洋戦争とその敗北であつたことも周知のところである。

第二次大戦における敗北は日本經濟を極度の混亂におとし入れたが、その廢墟のなかから復活したものはやはり資本主義であつた。憲法改正によって民主主義が導入され、軍隊はおおやけにはなくなり、農地改革で地主はいなくなり、社会生活はアメリカナイズされたが、日本はやはり資本主義であつた。もちろん、その資本主義は戦前とはかなり變化し、植民地の喪失、対米従属、産業構造の重化学工業化、等々、戦前にない特徴をあげればきりがない。しかし、重要な点で變らないことがすくなくともひとつはある。それは百年つづいた日本資本主義において、その經濟的支配者が一貫して、三井・三菱・住友という名前のつきたいわゆる財閥のグループだったとい

うことである。もつとも厳密にいうとかれらは明治の初期には政商と呼ばれ、のちには富豪、大正末期からは財閥、戦後は資本グループあるいは企業集団と呼ばれている。しかし、呼称は変わっても、かれらがこの百年、日本資本主義と運命をともにしてきたことには変りはない。おそらく今後もそうであらう。

それゆえ、「明治百年」は日本資本主義の百年であり、同時に財閥の百年でもある。わたくしが本書でこころみようとすることは、財閥百年の解明をつうじて、日本資本主義の百年を解明することにはかならない。

日本資本主義と財閥

生まれてからわずか一世紀という短い歴史とはいえ、日本資本主義は、この間一直線に発達してきたわけではない。他のいかなる歴史社会と同様に、それは生成し、発展し、爛熟し、没落するひとつの歴史的過程であった。さきに指摘した財閥の呼称の変遷も、こうした日本資本主義の局面の変化に対応した、かれらの存在形態の変化を表現しているのである。そこで本論にはいるまえに、日本資本主義の時期区分と、それぞれの時期におけるかれらのありかたについて、おおざっぱな概観をこころみておくことが便利であらう。

第一期は明治初年から二〇年代のはじめまで。この時期は日本資本主義の成立期、経済学用語をつかえば資本の原始的蓄積期である。維新政府による封建的諸制限の撤廃、近代諸制度および近代産業の欧米からの導入・移殖による殖産興業政策が、積極的に展開された時代である。

在来産業をのぞいて、移殖された近代工業は官営工場がめだつていどで、いまだ私的企業として確立しない。三井・三菱は政府の殖産興業政策と結びついた特権的商人＝政商として資本蓄積をはかり、この時期の後半に官業払下げをうけて産業的基礎を確立する。主な活動舞台は、三井は金融・商業、三菱は海運業であった。

第二期は明治二〇年代はじめから三〇年代のなかばまで。明治政府による原始的蓄積の政策が一段落し、二〇年代初頭の企業勃興による綿工業の近代工業としての成立とその後の発展によって、日本資本主義は確立する。三井・三菱もかかる事態の変化に対応して政商からの脱皮をはかり、炭礦・金属鉱山に生産部門の拠点をおきつつ、産業資本としての綿工業の流通部面で資本蓄積をはかる（三井物産と日本郵船）。銀行事業が確立するものこの時期で、全体として生産・流通・金融の三部門にまたがる多角経営体として定着をみる。

第三期は日露戦争前後から大正九年（一九二〇年）まで。この時期にはいって、日本資本主義は急速に帝国主義に転化してゆく。日露戦争で日本は軍事的に勝利したが、経済的には戦費と戦後経営の負担が大きく、大正三年（一九一四年）第一次世界大戦の勃発による好況が訪れるまで、慢性的な不況基調がつづいた。不況を背景に資本の集中がはじまり、綿工業の独占形成とならんで、三井や三菱も集中を強める。この時期は綿工業以外の産業部門でも近代工業が勃興した時代だが、かれらはそれらをしだいに傘下におさめ、多角経営を拡大しつつ、それを統轄する組織と

して持株会社を頂点にもつコンツェルンを形成する。三井・三菱は、財閥という形で金融資本に転化した。

第四期は大正九年（一九二〇年）から昭和五年（一九三〇年）まで。第一次大戦による好況は大正九年の反動恐慌で逆転し、以後一九二〇年代（大正九―昭和四年）をつうじて、日本資本主義は不況から不況へとよるめいてゆくが、この過程はコンツェルン体制を確立した財閥の支配圏拡大の、絶好の舞台であった。綿工業独占体の確立と並行して、財閥は多数の企業を傘下におさめ、ピラミッド型の支配体制を確立する。もっとも、その強力な支配力は銀行や商社の力に負うところが大きく、重化学工業の基盤は弱い。それは官営八幡製鉄所や軍工廠などの国家資本、一部の新興財閥の傘下にある。

第五期は昭和六年（一九三二年）から二〇年（一九四五年）まで。昭和五年に日本を襲った世界恐慌による深刻な不況を脱するため、日本資本主義は金本位制を最終的に停止し、軍需インフレによる帝国主義的対外侵略に活路を求めてゆく。満州事変・日華事変・太平洋戦争への道がそれであるが、財閥はここにはじめて、戦争経済の要求する重化学工業の舞台に積極的に進出してゆく。従来、政党との結びつきが強かった財閥が、軍部ファシズム下に「軍財抱合」を実現するものこの時期である。しかし、この道の帰結は敗戦であった。

第六期は昭和二〇年代（一九四五―五四年）。敗戦によって日本帝国主義は崩壊し、植民地を喪

失したうえ本土はアメリカを中心とする連合軍の占領下におかれる。経済の破局化のなかで財閥解体をふくむ一連の戦後諸改革がおこなわれるが、米・ソ対立という新しい国際情勢のもとで占領政策の転換があり、とくに朝鮮動乱を契機として対米従属下の資本主義の復興がはかられる。いわゆる「財閥の復活」がこの時期の後半に積極化する。

第七期は昭和三〇年代（一九五五―六四年）。いわゆる高度成長の時代である。戦後の内外の条件に規定されて日本の経済構造は激変する。戦前の中心産業であった綿・生糸・石炭などは斜陽化し、鉄鋼・機械・電機・石油化学などの重化学工業が技術革新の波にのって急成長する。旧財閥系資本は、この成長産業を舞台に再編再結集をはかるが、旧財閥系以外の企業の擡頭もあって、遠心運動と求心運動が交錯する。「財閥の復活」はたんなる財閥の復活でなく、いわゆる企業集団ないし資本グループとしての再編であることが明らかとなった。

そして現在。戦後日本資本主義は昭和四〇―四一年不況を画期として新しい局面を迎えた。高度成長は終焉し、開放体制への移行がオーバーラップして、本格的な戦後段階にはいつている。そのなかで旧財閥グループ相互の死活の闘争がはじまっている。大型合併、資本系列の再編等々……。このゆくえにはなにがまちかまえているのか。その点は本書の最後で示唆されるであらう。

I 政商としての三井・三菱

政商としての出発

まず最初に第1表をみていただく。これは明治初頭の三井と三菱の諸事業を年表にまとめたものであるが、一見してつぎの二つの事実が明らかである。

その一は、このわずか二〇年ばかりの時期に、のちのかれらの中心的諸事業ないしその淵源が登場していることである。三井の銀行・物産・鉱山（三池炭礦）はのちの三大直系会社であるし、三菱の諸事業も日本郵船のほか、のちのおもな直系会社である三菱銀行・三菱造船・三菱鉱業などの前身をなすものである。第二は、これらのちの中心的諸事業が着手される契機として、あるいはそれら諸事業のあいまをぬって、政府御用にかかわる諸活動が大きなウェイトをしめていることである。三井関係で会計事務局や商法司は政府機関であるし、為替会社・通商会社はいずれもいわば国策会社であった。三菱はもっぱら海運事業での軍事輸送で政府に結びついている。

これだけからもうかがえるように、この時代の三井・三菱は、政府御用をつとめつつ、みずからの事業基盤を固めたのであった。こういうタイプの事業家は、三井・三菱のほかにも、著名な

もので住友・安田・鴻池・渋沢・大倉・浅野・古河・五代などがいたが、かれらを当時のひとびとは政商と呼んでいた。なかでも三井と三菱は、代表的な政商だったのである。

ところで、政商ということばは、この時代にはじめてつくられた用語であった。明治の史論家山路愛山は、『現代金権史』（明治四十一年）において、「政商とは支那の字書にも無く、日本の節用集にも無き名なり。無きは当然なり。これは明治の初期にその時代が作りたる特別の時世にできたる、特別の階級なれば……」とのべ、その發生のゆえんをつぎのように説いている。すなわち「最初の明治政府、ことにその中心の人格たる岩倉、大久保諸公が国家自ら主動の位置を取りて民業に干涉し、人民の進まぬ前に国家先ず進み、世話焼と鞭撻と、奨励と保護とを以て一日も早く、日本国を西洋の様に致したしと覚悟の臍はそを極めたるは事実にして、保守党よりは質素簡易なる皇国の美風を棄てて西洋の真似を致すは不都合なりと叱られ、進歩党よりも余計の世話を焼て人民の進歩を妨害するものなりと罵られたるに頓着せず、銀行も政府自ら模範を造り、製糸場も役人において経営し、さアどうだ、これでも眼がさめぬか、これでも進まぬかとしきりに人民の尻をたたき立てたり。さてかように政府が自ら干涉して民業の發達を計るに連れておのずからできたる人民の一階級あり。我等は仮りにこれを名づけて政商という」と。

政商——それをやや厳密に定義づけるとするならば、明治前期において政府の殖産興業政策に沿いつつ、政府からあたえられた特権あるいは政府御用をつとめることによって、巨大な資本蓄

I 政商としての三井・三菱

第1表 明治初期における三井・三菱の事業年譜

三井		三菱	
慶応4.2	会計事務局御為替方	明治3.10	土佐開成商社設立(海運)
5	商法司元締頭取	明治5.9	萬歳, 音河両炭山稼行(炭 礦の始)
明治2.2	為替会社総頭取	明治6.12	吉岡鉦山稼行(鉦山の始)
	通商会社総頭取	明治7.一	征台役軍用輸送にあたり 政府から汽船13隻を受託
明治4.8	大阪三井兩替店内に大蔵 省御用為換座三井組開設	明治8.1	上海航路を開く
10	大蔵省正金兌換証券発行	12	三菱製鉄所(船舶修理) 設立
明治5.1	開拓使正金兌換証券発行	明治9.6	三菱会社内に為替局設置
明治6.6	小野組とともに第一国立 銀行設立に参加, 経営	明治10.2	西南役に軍用輸送にあた る
明治9.3	私盟会社三井銀行設立	明治11.3	東京海上保険設立に参加
7	三井物産会社設立(三池 炭の一手販売権を獲得)	明治13.7	三菱為替店設立(銀行の 始)
明治11.5	三井銀行, 起業公債募集 引受	明治14.3	高島炭礦買取
明治15.7	三井系資本による共同運 輸会社設立(明治18.9.三 菱海運業と合併, 日本郵 船会社となる)	7	明治生命保険設立に参与
		明治17.6	長崎造船所の貸下げをう ける(明治20年払下げ)
明治21.8	三池炭礦の払下げをうけ る	明治18.5	第百十九国立銀行を継承
		9	海運業を共同運輸会社と 合併, 日本郵船会社設立

資料:『三井本社史』, 三菱合資『社誌』などによる。

積をなしとげた商人資本、と
いうことができよう。このば
あい商人資本とは、たんに商
業にのみ従事する資本でなく、
産業資本の成立する以前の、
資本主義の成立期に支配的な
資本のことをさす。ところで、
三井や三菱をはじめ、この時
代のおもな商人資本が、なぜ
日本に独得の政商という存在
形態をとったのか。いかなる
特殊な条件が、この時期の日
本資本主義に政商なるものを
生みだしたのか。三井・三菱
の政商活動の実態をさぐるま
えに、その点について多少の